

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04195

研究課題名(和文) 遠距離介護の社会学 / 社会福祉学的研究：高齢者本人の意思を尊重したケアの方法

研究課題名(英文) Sociological/social welfare research of long-distance caregiving : Elucidation on the way of care to respect the elderly's will

研究代表者

中川 敦 (Nakagawa, Atsushi)

宇都宮大学・地域デザイン科学部・准教授

研究者番号：30609904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者本人を尊重したケアの方法として、「本人への意向の伺い」と「本人の意向の代弁」が行われていた。そこでは提案への意味づけを、相手(福祉の支援者/離れて暮らす家族)に受け入れやすい形へと変化させる作業が行なわれていた。また親を意思決定に関与させる位置は、多くの場合、離れて暮らす子供とケアマネジャーによる意思決定について合意が図られた後であることが明らかになった。これは、認知判断能力に、衰えが見られる親を意思決定に関与させるため、子供とケアマネジャーの意思決定の過程を反映させて、親の応答が行いやすくなるように、yes-no質問の形式での発話順番のデザインを実現するためであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、遠距離介護の中で高齢者本人の意思を尊重したケアを実現するための人々の方法を、「会話分析」のアプローチから明らかにするものであった。遠距離介護において離れて暮らす子供たちは、自らの身体的・経済的限界や、福祉サービスの限界などと、高齢者本人が望む生活の実現の間で常に揺れ動いている。こうした中で、高齢者本人の意思を尊重したケアがいかなる方法で実現されているのかを解明した本研究成果は、遠距離介護の困難軽減につながる重要な知見となるものである。

研究成果の概要(英文)：Methods of care that respect the elderly, "asking the elderly about their wishes" and "speaking for the elderly" were used. In this process, the proposal was modified to a form that was acceptable to the both parties (welfare supporters/family members living apart from the elderly). It was also found that in most cases, the parents were involved in the decision-making process only after the care manager and the child had reached an agreement on the decision-making process. This was done in order to involve the parents, whose cognitive abilities were declining, in the decision-making process, and to design a speech order in the form of yes-no questions that reflected the decision-making process of the child and the care manager and facilitate the parents' responses.

研究分野：高齢社会学

キーワード：遠距離介護 会話分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 遠距離介護の先行研究

高齢者本人と遠く離れて暮らす子供が、ケアや介護のために頻繁な帰省を繰り返す、遠距離介護という現象は、1983年にはじめてアメリカの新聞記事で報告された(The New York Times, December 29, 1983)。日本ではその約10年後、1994年に『AERA』が同現象について最初の報告を行なっている(山脇 1994)。しかし遠距離介護の研究の開始は、アメリカでは1990年代後半以降(Wagner 1997)、日本では2000年代以降である(松本 2003)。現在、離れ暮らす子供のうち1万5千人~3万人が遠距離介護に携っていることが推計され、今後はさらなる増加が予測される。こうした中で研究代表者は、日本で遠距離介護の研究が開始された2000年代初頭から、一貫して遠距離介護に関する経験的な研究を進めてきた。

依然として蓄積の少ない遠距離介護の先行研究であるが、それらを概観した時、大きく社会学的研究・社会福祉学的研究の2つの分野から、次のような知見が明らかになっている。まず社会学的研究では遠距離介護に関する分析から、家族、介護、移動などに関する社会変動の指摘が行なわれてきた。そこでは親子の居住形態が同居から別居に変化したこと、介護におけるコミュニケーションの側面の重要性の上昇、個々の家族の移動性の高まりなどが浮かび上がっている(Baldock 2000; 中川 2012)。他方、社会福祉学的研究では、実際の遠距離介護の事例の分析から、遠距離介護のために望ましい支援のあり様が提示されてきた。特に、遠距離介護に対して重要になるのは、高齢者のみならず離れて暮らす子供たちにも働きかけるソーシャルワーク機能であることが指摘されている(Heath 1993)。

(2) 従来の研究の限界

以上の研究はそれぞれに一定の意義を有するものであるが、次のような限界が存在する。まず、遠距離介護の「社会学」的研究では、遠距離介護を通して社会(あるいは、家族・介護・移動等のように設定されるより高次の概念の一般化された現状)を説明しようとする志向性が強い。他方、遠距離介護の「社会福祉学」的研究では、遠距離介護に働きかけるべき支援の規範的な主張を行なおうとする志向性が見られる。その結果、遠距離介護の社会学/社会福祉学的研究は、同じ現象を対象としていながら、互いがすれ違い、両者の知見が結びついていない。加えてそれぞれの研究の特有の志向性のために、どちらも遠距離介護が実際どのように行なわれているのかを十分に分析することができずにいる。そのことは、社会学/社会福祉学の双方が、遠距離介護の現実に有用な学問的知見を十分に提供できずにいる一つの要因になっていると考えられる。

(3) 遠距離介護の会話分析

こうした現状を打開し、遠距離介護の現場にその学問的な知見を、真に還元可能にする研究を研究代表者は模索してきた。その結果、特に海外において、医療コミュニケーションの分野で非常に多くの成果を出している「会話分析」のアプローチを遠距離介護に適用することに思い至った(Heritage & Maynard 2006)。そして離れて暮らす家族と福祉の支援者が参加して行なわれるケアカンファレンスのビデオデータの会話分析に取り組むことで、次のような知見を明らかにした。すなわち、身体介護が相対的に少ない遠距離介護では、高齢者の介護や生活の方針を決定する意思決定がその中心的な課題となっている。そうした中で、遠距離介護の意思決定過程の参加者が直面する一つの大きな問題は、離れて暮らす家族の負担の限界や、福祉の支援者と離れて暮らす家族の見解の相違といった、遠距離介護に特有の道徳的なジレンマにいかなる形で対処するかということであったのである(中川 2016)。

2. 研究の目的

以上のように、遠距離介護の困難軽減に資する知見を明らかにしてきた研究代表者のこれまでの研究だが、そこには大きな問題が存在する。それは遠距離介護における実際のコミュニケーションを分析した研究において、高齢者本人がコミュニケーションに含まれていないという点である。高齢者のコミュニケーションへの参加は、高齢者本人の生活や介護方針に関する意思決定が行なわれている場面において、高齢者本人の意思の尊重のために紛れもなく重要である(上野 2011)。実際に、1991年にアメリカで出版された遠距離介護に関する最初期の書籍では、遠距離介護において高齢者本人の意思を尊重することの重要性が繰り返し述べられている(Heath 1991)。その一方で、時に高齢者がコミュニケーションに参加していても、判断能力の低下などによって、本人のみでは十全な意思決定ができなくなることがある。実際、そうした場面において離れて暮らす子供が高齢者の代わりに役割を果たす必要があることは、これまでの遠距離介護の研究でも指摘されてきた。このとき遠距離介護の社会学/社会福祉学的研究にとって、大きな研究課題が浮かび上がる。それは、遠距離介護において、高齢者本人の判断能力に衰えが生じている状況の中で、離れて暮らす子供たちと福祉の支援者が高齢者本人の意思の尊重を実現させているとするならば、それはいかなる方法を通じてなのか?という問いである。

3. 研究の方法

本研究は遠距離介護において、高齢者本人の意思を尊重したケアを実現するために人々が用いる方法を明らかにするため、「会話分析」という研究方法を採用する。会話分析は社会学の一分野として始まり、会話という一つの社会現象を通して、人々がこの社会を組み立てている「方法」を明らかにすることをその目的とする。会話分析は研究の精神として、徹底して参加者の志向に根ざした記述を目指し、研究者がデータを離れて外部から説明を行なうことを排除する。こうした分析態度は、人々が実際に用いている方法それ自体を析出することを可能にし、現場にその成果を還元することを可能にするため、本研究に最もふさわしい研究方法と考えられる。分析の対象としたのは、離れて暮らす子供、福祉の支援者に加えて、高齢者自身が参加しているコミュニケーション場面のビデオ撮影調査データである。

4. 研究成果

高齢者本人を尊重したケアの方法として、大きく2つの現象の存在が明らかになった。それは「高齢者本人への意向の伺い」と「高齢者本人の意向の代弁」である。そこでは、行なわれている提案への意味づけを、相手(福祉の支援者/離れて暮らす家族)に受け入れやすい形へと変化させるために、代弁のみならず、高齢者への意向の伺いが行なわれているのであった。また、代弁と同時に、親の意向について家庭内でどのような対応を行っているかについても、家族からケアマネジャーに伝えられる場合があることが明らかになった。そのことが、その次の位置においてケアマネジャーの側から、サービス調整を通じてどのような対応を行えるかを提示することを可能にしているのであった。この現象は、家族とケアマネジャーの双方がそれぞれの領域において責任を有している情報を提示しあうという規範的構造が利用されていることを示唆するものであった。

また親を意思決定に関与させる位置は、多くの場合、離れて暮らす子供とケアマネジャーによる意思決定について合意が図られた後であることが明らかになった。これは、認知判断能力に、衰えが見られる親を意思決定に関与させるため、子供とケアマネジャーの意思決定の過程を反映させて、親の応答が行いやすくなるように、yes-no 質問の形式での発話順番のデザインを実現するためであった。一方で、離れて暮らす子供とケアマネジャーの間で意思決定に何らかの対立が生じている場合には、いわば挿入的な形で、意思決定を行うための前提となる、親の生活の状況やサービスについて現状の確認が親に対して行われ、その応答に基づいて、離れて暮らす子供とケアマネジャーの間での意思決定に戻ることがわかった。ここでは、親の認知判断能力の衰えを配慮して、未来の意思決定を親に委ねるのではなく、親が答えやすい現状の認識を問うことで、遠距離介護の意思決定について親への負担を下げながら、親を意思決定に関与させるという工夫がなされているのであった。

以上の知見は、高齢者本人の意思を尊重したケアを遠距離介護の中で実現するための、人々の方法の一端であり、今後の遠距離介護支援を考えるための基礎的な意義と重要性を持つものと考えられる。

【文献】

- Baldock, C. V., 2000, "Migrants and their Parents: Caregiving from a Distance," *Journal of Family Issues*, 21, 205-24.
- Heritage, J., and D. W. Maynard, eds. *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients*, Cambridge: Cambridge University Press. (2015, 川島理恵ほか訳『診療場面のコミュニケーション 会話分析からわかること』勁草書房.)
- Heath, A., 1991, *Long Distance Caregiving: A Survival Guide for Far Away Caregivers*, California: American Source Books.
- 松本一生, 2003, 「痴呆の遠距離介護と家族援助の課題」『家族療法研究』20(1): 10.
- 中川敦, 2012, 「遠距離介護と同居問題 『なぜ?』はどのように語られるのか」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ』法政大学出版局, 137-162.
- 中川敦, 2016, 「遠距離介護の意思決定過程の会話分析 ジレンマへの対処の方法と責任の分散」『年報社会学論集』29号, 56-67.
- 上野千鶴子, 2011, 『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- Wagner, Donna L., 1997, *Caring across the Miles: Findings of a Survey of Long-distance Caregivers*, Washington, DC: National Council on the Aging.
- 山脇文子, 1994, 「姥捨山をつくるな 離れて暮らす親の老後」『AERA 臨時増刊 老人を棄てない 高齢化社会を生き抜く知恵』7巻37号: 36-7.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中川敦	4. 巻 13
2. 論文標題 離れて暮らす老親を持つ子供とケアマネジャーのEメールにおける遠距離介護の意思決定過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shi tsuforum.13.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中川敦
2. 発表標題 遠距離介護のEメールにおける離れて暮らす子供とケアマネジャーの意思決定過程の解明
3. 学会等名 2020年度EMCA研究会春の研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川敦
2. 発表標題 遠距離介護における離れて暮らす子供とケアマネジャーの電話の会話分析
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Atsushi Nakagawa
2. 発表標題 The Decision Making Process as it Relates to Long-distance Caregiving of an Elderly Person: Conversation Analysis of Representing the Elderly and Confirming their Will
3. 学会等名 IIEECA19
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakagawa, A.
2. 発表標題 When, how and why an elderly person with dementia is involved in interaction related to long distance caregiving?
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (ICCA 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsushi Nakagawa
2. 発表標題 Respect for agency in long distance caregiving: Self selection by a distant child for a selected elderly parent
3. 学会等名 The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------